進化する道立白老東高校「地域学」
～体験から交流・発信へ～

同高の特色ある選択科目「地域学」の発表会がこのほど開かれ、1年間学んできたの生徒らがそれぞれの成果を動画で披露しました。最後の授業では「人の魅力に興味を持ち、感動しました」と振り返っていました。

選択科目「地域学」誕生

同科目は学校独自の科目として2018年度に開設されました。3年生が「マーケティング」「フードデザイン」「生物」と「地域学」の四つから選び、週2時間学んでいます。

「地域学」は「地域（白老町）、アイヌ民族の歴史と文化を学ぶ」授業です。例年、同高の生徒の約6割が苫小牧出身者であることを踏まえ、3年間白老に通うだけでは、地域への愛着やアイヌ文化への理解が育たないことも考慮した科目です。

開設間もなくはアイヌ民族の伝統文化であるムックリや刺しゅう、狩猟など「体験」や外部講師の講演を中心に授業は進められましたが、実体験から得られる学びはあるものの、高校生としては一時的な受け身感が残りました。

学びを深め、広げる授業へ

そんな折、外部から「大町商店街を盛り上げるために力を貸してほしい」との依頼が舞い込みました。担当する白老出身の志田健教諭も、生徒の学びを深め、広げる授業展開を模索していただけに方向性を転換しました。

まずは「ウポポイPR動画」を制作し発信する授業を実践しました。企画力、行動力、コミュニケーション能力、制作技術が問われます。

そこで掲げたのは次の五つでした。

▶地域やアイヌ文化を学ぶ以外のこの授業の特徴◀

①フィールドワークなど学校の中だけではなく、地域に出て学ぶ。
②親や教員以外の地域のさまざまな大人たちと直接交流する。
③受け身で学ぶのではなく、自分たちで考えて企画したり工夫する。
④町の課題解決に向けて、映像を使って自分たちから情報発信することで地域のために貢献するプロジェクトを実施する。
⑤グループ内で協力して進める。

生徒、町に飛び出す

最初は、「フィールドワークとはどのようなものか」について、名古屋の大学の先生、大学生のオンライン授業でみっちり学びました。

別の大学の先生からアイヌ文化についての授業を受けた後、早速22人の生徒が「カムイ」「家」「食文化」などのテーマに分かれてウポポイを取材、動画を作成しました。

さらに、白老の可能性を知り視野を広げるため、町内で活動する青年会議所、SNS発信者、地域おこし協力隊の皆さんと交流会を開催。「ざっくばらんな話し合いで生徒も触発されたようでした」（志田教諭）。

制作技術の向上も余念がありませんでした。映像制作のプロを招へいした講習も開催しました。「確かに映像が全然違いました」（同）と成果が上がったようでした。

そして生徒たちが全て段取りをつけた単独のフィールドワークを実施。大町商店街のカメラ店、米穀店、家具店、工芸店、喫茶店、洋菓子店、居酒屋、衣料品店など14店舗を訪れ取材。お店の特色をはじめ、店主の話、感想・意見をまとめた動画を制作、発表しました。

志田教諭は最後の授業で書いてもらった感想アンケートに少し驚きました。「白老には確かに誇る食べ物や自然など地域文化がありますが、生徒たちは真摯に応対してくれた商店主たちの人となりに触れ、語ってくれた生きがいや商売、地域への思いに興味を持ち、感動したという感想もありました」と、うれしそうに話しました。

「子どもたちは外の世界に出ていきます。当然の話です。でも白老には何もないとするか、魅力を知って出ていくのとでは全然違います。また、いつか戻ってくる場合もあるでしょう。『地域学』がその種まきになればと思っています」。

「商店主への取材で『人』の魅力を知りました」

広報編集室 げんきまち通信

家庭に眠っている“町の記憶”の提供をお願いします

町は、昭和29年の町制施行から70年を迎える令和６年度の発刊を目指し、新しい町史の編さんを進めています。編さんに当たり、町の歴史を振り返る下記の資料を探しています。家庭に眠っている“町の記憶”がありましたら提供をお願いします。

「昔の町広報紙（昭和50年代以前）」「古い町史や要覧、記念誌」「モノクロ時代の町並みや風景写真」など

問い合わせ先：元陣屋資料館　☎８５－２６６６